**ユルゲン・ハーバーマスへ質問Interview：「ポスト世俗の世界社会とは？」**

**A postsecular world society?: An interview with Jürgen Habermas**

a short excerpt from a recent interview with Jürgen Habermas.

<http://blogs.ssrc.org/tif/2010/02/03/a-postsecular-world-society/>

February 3rd, 2010　Interviewer: Eduardo Mendieta

和訳rev.1　齋藤旬　2013.10.11

**Eduardo Mendieta (EM)**：　過去2-3年間、貴方は宗教の問題について、哲学、政治、社会学、moral、認識論、の一連のperspectivesから検討されてきました。貴方は2008年秋のYale大学での講義で、社会論と世俗化論のlinkについて再考すべきであるという観点から、宗教が行っているchallenge（難事業） --- 世界社会において不可欠なものとして宗教自らをrenewalしようとしている --- について説明しました。そういった幾つかの講義で貴方は、近代化論と世俗化論をuncoupleする必要があるとsuggestなさっています。貴方の意図はどういうものでしょうか？　西洋社会論の主流、即ちパレート（Pareto 1848-1923）によって始められ、デュルケム（Durkheim 1858-1917）によって続けられ、ウェーバー（Weber 1864-1920）によって絶頂期に達した理論と距離を置くものでしょうか。広く認められた明らかなEurocentrismとは一線を画するものでしょうか？

**Jürgen Habermas (JH)**:　まだ産湯につかっているような赤ん坊を、おもてに放り出すようなことはしてはいけませんよ。即ち、世俗化社会学に関するdebateは、医学でいうところの「予後診断」としてまだ編集を加えられている段階です。他方で、宗教システムは今では全く違うものとなっていて、pastoral care（患者とその家族の心のケア）に限定されています。即ち、宗教の他の機能は大幅に削（そ）がれています。そして、社会の近代化と、宗教が日増しにその重要性を失っていくこと、との間にはglobal connection --- 宗教が消失したと確認できるほどのcloseなconnection --- はありません。また、未完の議論、即ち、宗教的米国と、大幅に世俗化した西欧とのどちらが、一般的発展傾向にとって例外なのか、の様な議論においては、例えばJosé Casanovaが興味深い新仮説を展開しています。が、兎に角globallyには、我々は依然としてworld religionsの生命力に期待できるでしょう。

貴方が今話された関連でいうと、Shmuel Eisenstadtとそのグループによる、civilizationsの比較研究のprogramは、promising and informativeだと思いますよ。南米の新興世界の社会では、その社会インフラとして宗教が --- それは西洋先進国にもかつてあったものなのですが…。とにかく、南米新興国はmultiple modernitiesの形態を採った。即ち、何世紀にもわたってgreat world religionsがa great culture-forming powerを持ち続けたので、宗教が依然として力を失っていないのです。西洋は、この“strong”な traditionsの力を使って、東アジアへの道も切り開きました。中東へもアフリカへも、西洋流のcultural structuresをそこに展開するために。皮肉なことに、出処は同じこれらの地域のcultureが今日、human rightsの正しい解釈をめぐって論争を続けていますがね。･･･私たち西洋においては、近代性は私達の伝統（つまり西洋宗教）と対立するものとして出現しました。世界の他の地域でも今日、近代性と伝統のこの種の対立的対話が繰り返されています。西洋先進国と同様にそこでも、自分達の伝統を、社会近代化に屈服するものでなく対立挑戦するものとしているのです。この論争に対抗できるものとしてintercultural discourses（文化間対話）が、より正義に適う国際秩序の基本について、持たれることも考えられますが、それも、「どちらが長男か」という観点で一方に肩入れするようなまねは最早できなくなっているのです。結局、global playersがDarwinist的社会進化論のpower gamesをコントロールして、mutual perspectiveに対称条件を持ち込む限り、この手のdiscoursesは必ず自慰的（habitual [sich einspielen]）になるのです。もはや西洋（The West）は他と同じ一人の参加者でしかありません。そして全ての参加者が、他の参加者に「どうか私の盲点に光を当ててくれ、つまり啓蒙してくれ」と頼んでいる状態なのです。先のfinancial crisisから我々が何か一つ学ぶとしたなら、それは、多文化世界の社会が政治的に一つの憲法を開発するギリギリのタイミングだ、ということでしょう。

**EM**:　最初の質問に戻ります。即ちもし、もはや近代化を世俗化の用語で説明できないとしたなら、我々は、societal progress（社会の進歩）とは何であると言えば良いのでしょうか？

**JH**: 国家権力の世俗化は、世俗化プロセスのhard coreです。私は、これは自由主義の一つの功績であると思います。従って、world religionsの論争において忘れてならない事柄です。と同時に私は、“good life”の複雑な次元からprogressを論じることには期待しません。一体どうして、我々は自分達のことを、祖父母や古代ローマ時代に自由市民となったギリシャ人奴隷よりも幸せなんだといえるのでしょうか？比べようがないと思います。ただ勿論、ある人が他の人よりラッキーだということがあるでしょう。荒海に臨めば、一人一人の運命は荒海の偶発性に委ねられるのです。そして今日、happiness [das Glück]は、かつて無いほどunjustlyに分配されています。恐らく歴史の中で何かが変化したのでしょう。実存的経験の主体的色づけ（the subjective coloration of existential experiences）において何かが変化したのでしょう。しかしながら、喪失、愛、死といったcrises（重大事項）においては如何なるprogressも起きてはいません。personalな痛みを和らげるものはありません。即ち、悲惨のうちに暮らす人々、孤独を感じ病に苦しむ人々、思想や信仰を問い直される試練（tribulations）を受ける人々、辱めや侮辱を受ける人々、その様な人々の痛みを和らげるものはありません。それでもなお、文化人類学的定数（anthropological constants）により実存を洞察し、歴史の多様性を忘却するというのは、我々が決してしてはいけないことです。人類が*learn*することが出来る全次元において疑いなく起こった歴史的progressを、一つとして取りこぼしてはいけません。

こう言ったからといって、私は何も、我々は歴史の中で起こった沢山のことを忘れ去ってしまった、と言っているのではありません。そういうことではなく、諸事の結果から学ぶプロセスを経た時点よりも以前の時点に*intentionally*に戻るというのは、我々が決してしてはいけない事だと。例えば、technologyやscienceにおけるprogress、あるいはmoralityやlawにおけるprogressにおいては、我々のego-centeredまたはgroup-centeredなperspectivesをdecenteringすること、そうすることによって初めて、conflicts of actionを非暴力的に終えることが出来た、と言っているのです。progressをこの様に社会が認識したのならば、既に、reflectionにおける更に新たなdimension --- 換言すればthe ability to step back behind oneself --- が獲得されたのです。即ちその場合は、Max Weberの言う“disenchantment”（脱魔術化）が起きたのです。

では、実際の「現時点での最新事項」をトレースしてみましょう。即ち、西洋的近代性への、自我の再帰性[[1]](#footnote-1)の観点における、「それは社会的に適切なのか」という問題投げかけ（socially relevant push in the reflexivity of consciousness to Western modernity）についてトレースしてみましょう。西洋近代の初期においては、国家官僚の政治権力に対するattitudeは、制度的に大幅にfree of moral norms（倫理規範に関して自由）でした。これは、先述の自我の再帰性のステップを、制度的attitudeにおいて、キチンと踏んでいることを示しています。ちなみに何よりも近代科学が、方法論的客体優先主義（methodologically objectified nature）を志向した自我の再帰性のステップにより可能となったのも、これとほぼ同じ時期です。それと勿論、特筆すべきは、17世紀にこの自我の再帰性のステップによりrational law and autonomous art（合理的な法、自律的な学術）が可能となりました。それから18世紀には、rational morality and the internalized religious and artistic forms

of expression of pietism and romanticism（合理的倫理性、内面化された宗教、敬虔主義とロマン主義の芸術表現形式）が可能となりました。最後に19世紀には、historical enlightenment and historicism（歴史的な啓蒙、歴史相対主義）が可能となりました。実に広い分野に効果を及ぼし、これらの多くの新たな認識（cognitive）が促されました。容易に忘却されることはありません。

一般的伝統的な信心（piety）にprogressive disintegrationが起こったのも、広い分野に効果を及ぼす「自我の再帰性」の関連でとらえるべきでしょう。近代に特有な二つの形態がreligious consciousness（宗教的自我）に新たに加わりました。一つは、a fundamentalism（原理主義）です。それは、近代世界から引き出されたものですし、また近代世界に攻撃的に敵対するものでもあります。もう一つは、a reflective faith（再帰的あるいは内省的な信仰）です。それは、自らを他の宗教との関連の中に置き、制度化された科学と基本的人権はfallible（当てにならない。誤りを犯しがち。）だとの洞察を持っています。このfaithは現在でもなお、信徒集団の生活の中にanchored（深く根をおろす。船が錨を降ろす。）しています。なおこのfaithを、別の種類と混同してはなりません。別の種類 --- 当該主体の中に完全にwithdrawnされ、deinstitutionalized forms（非制度化された形態）をとるfickle religiosity（気まぐれで、移ろいやすい宗教性）--- と混同してはなりません。

***このInterviewの全編（英文）をお読み頂くには、***[***ここ***](http://blogs.ssrc.org/tif/wp-content/uploads/2010/02/A-Postsecular-World-Society-TIF.pdf)***をクリックしてください。***

1. 訳者註）　reflexive self-consciousness（再帰的自我）ともいう。自我を除いて全てのものは、主体か客体かに分類できるが、自我だけは主体にも客体にもなり得る。つまり、主体としての自我が客体としての自我を、主観的にも客観的にも思考の対象とすることが出来る。自我が自我を他者とすることが出来る。これを「自我の再帰性」という。 [↑](#footnote-ref-1)